

2023年4月分総評 杉本真維子

「公安の監視下にあるほたるいか」松下誠一(東京都)

「ほたるいか」がなんともアナーキーです。「公安」「監視」などの言葉がまとう権力を瞬時に骨抜きにしています。

「脱法のトランポリンと聞いている」松下誠一(東京都)

こちらも上と同様の手法と思いますが、伝聞によって語り手以外の誰かを巻き込んでいて、そのトボケぶりが輪をかけて面白いです。

「沈黙の並ぶどこかで狂犬が／吠え続けている地下駐車場」大嶋碧月(兵庫県)

「並ぶ」「地下駐車場」などの整然としたイメージがうつわ(型)をつくりだしています。そこから吹き零れる狂犬の吠声が鮮烈です。

「傷つける言葉の通りに傷つけて／雨のぬるさに今、驚いた」大嶋碧月(兵庫県)

混迷から覚醒へ。認識を打ち破る「雨のぬるさ」を大変鮮やかに捉えています。

「死んでいる虫を拾う／私の方がよっぽど／死んでいるのに」秦大地(東京都)

このように思いながらも拾う。そのときのかがめた姿勢や素朴な指が一瞬よぎって、語りがたい感情を伝えてきます。

「地図に落とすたびに唸ってくる獣」合川秋穂(東京都)

どんな獣でしょう。存在するのに見えないことこそが獣の本質かもしれません。

「あきらめた陽射しの中で転がった／鈴はどこかで風になります。」im(沖縄県)

諦念からのねじれるような変調が美しいですね。「風は鳩を受胎する」(大岡信「地名論」)をふと思い出しました。

「十八で／お前を殺して俺も死ぬ／愛の終わりに電車のブレーキ」加藤万結子(愛知県)

この作品を連作の一つと見たときにしかいえないことですが、もしも子を送り出す母の気持ちとするなら、一人称を「私」でなく「俺」としているところに切実な「ブレーキ」を感じました。

「花冷のとなりの見える小便器」にしげわゆうと(福井県)

視覚に入り込む小便器の白さが花冷を際立たせています。「の」の助詞のどこかあやういつなぎ方が独特の世界を生んでいます。

「桜の花びらが散り／蕊の臍脂が覗き始める／白髪交じりの／髪を梳かす」山本欠伸(兵庫県)

三行目の小さなジャンプが印象的です。着実に年齢を重ねることと言葉の動きがかみあっている、と感じます。

「1時間休みを使い来た花屋／流れる日々に読点を打つ」貴田雄介(熊本県)

人と花によって彩られる読点の素晴らしいしさ。光とはこのように「日々」に射し込むものなのだと思います。

した。

「星団か或いは墓場のようでいて／時に深夜の風呂は優しい」マズルカ(山口県)  
「深夜の風呂」にはたしかにどこか原始的な心の手触りがあります。ひたひたと深い洞窟を降りていくようでもあります。

「ピアノピアノ／黒いピアノに春が来る」有野水都(東京都)  
「ピアノピアノ」という連呼が効いています。春を迎える、浮き立つ気持ちが、黒いピアノをも明るく染め上げるようです。

今回も力作が集まりました。新しい投稿者も続々と現れています。次回も楽しみにお待ちしています。